令和６年２月５日

徳島県教育委員会

教育長　榊　浩一　殿

徳島県教育委員会コンプライアンス推進チーム
座長　小坂　浩嗣

徳島県教育委員会コンプライアンス推進チーム会議報告書

徳島県教育委員会コンプライアンス推進チーム設置要綱（令和５年８月１日施行）に則り、徳島県教育委員会コンプライアンス推進チーム（以下、推進チームと略記する）が組織されました。推進チームには、徳島県教育委員会から教職員による児童生徒に対する不適切な行為及びわいせつ行為等を根絶する有効な対策を検討し、提案するよう指示がありました。当推進チームが、全４回の会議にて協議した結果を以下の通り報告いたします。

１　検討の前提

１-１　社会的背景

令和３年６月４日に「教育職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する法律」（以下、性暴力等の防止法と略記する）が公布され、令和４年４月１日から施行されている（令和５年７月13日一部改正）。この法律は、児童生徒等の尊厳を保持するため、学校内外を問わず教育職員等による児童生徒に対する性暴力等の防止等に関する施策を推進し、児童生徒等の権利利益の擁護に資することを目的としている。同法では、児童生徒等に対する「わいせつ行為」について、「性暴力」であると定義され、「性暴力」には、①従来、刑事罰が科されなかった行為も該当し得ること、②児童生徒等の同意や暴行・脅迫等の有無を問わないことと規定されている。

徳島県においては、施行後の令和４年度間にわいせつ行為等による懲戒処分（免職）が２件あったことから、上記法律の目的に照らし、厳正かつ実効性のある方策が求められた。

１-２　検討の前提

令和４年度間に発生したわいせつ行為等不祥事の２事案について、要因分析と方策策定の方向性を探ることを目的に、該当する２校の学校長に対してヒアリングを実施した。その聴取内容についてアドバイザー会議で協議し、性暴力等を根絶するに有効な対策についての基本理念と基本方針（ガイドライン）を定めた。

1-2-1　基本理念

(1)　教職員による性暴力等を個人の問題に帰するのでなく、個人および組織としてのあり方として

考える。：「誰かが見ている」仕組みづくり

(2) 自分事として頑張れるポジブティブ志向で取り組め、持続可能な仕組みを考える。

(3) 制度、組織、個人のリソース（既有資源）を利活用する。

1-2-2 基本方針

(1) 教職員一人ひとりが自分と向き合い、ブレーキ機能をもつ仕掛けを工夫する。

従来、徳島県で活用されてきたチェックシートをベースに、性暴力等に関して具体性があり、インパクトあるチェックシートに改善・開発する。また、個人にとどまるのでなく、学校組織としての風土や学校文化等もチェック対象とする。

(2) 研修を実効性のあるシステムに再構築する。

性暴力等を含めてコンプライアンス研修が、これまでに多種多様な形態で開発・実施されてきた。これらリソースを再検討し、研修後に有用感が残り、次の研修意欲へつながる仕掛けを工夫する。

2 性暴力等を根絶するための対策の提案

基本理念と基本方針をもとに、推進チーム会議では、有効性ある対策のコンセプトを確認した上で、①チェックシートの改善・開発、②研修システムの再構築を協議し、策定した。

2-1 基本的な考え方（コンセプト）

児童生徒等を守り育てる立場にある教職員が、児童生徒等に対して性暴力等を行うことは、断じてあってはならないことは言うまでもない。ただ、本対策を議論するにあたり、その要因を個人の責のみに帰するのではなく、組織として個人が罪を犯さないようにするにはどうすればよいかといった考えのもと、組織（学校）や社会（地域）からの視点も取り入れ、個人を幾重ものセーフティネットで支える仕組みを作ることとした。そして、すべての人の幸福感（Well-Being）追求に思考転換して協議を進めた。

性暴力等の防止法を踏まえながら、性暴力等を根絶するに有効な対策を検討する上で、倫理観、人間観、人生観の３観点から、基本的考え方を土台に置くことにした。（添付資料１）

(1) 「お天道様が見ている」との日本人の倫理意識を基盤にする（モラルベース）

(2) 人が有する個性・知性・感性という人間性を生かす（ヒューマンファクター）

(3) 個人・学校・地域それぞれの幸せをめざす（ウェルビーング）

2-2 方策（ストラテジー）

個人・学校・地域それぞれの幸せをめざす仕組みづくりとして、これら３つの次元での取組を策定した。これら３つの次元での取組により、セーフティネット機能が有機的に作用することをねらいに、「対策パッケージ」として構造化した。(添付資料２)

３つの次元での取組は、３つのフェーズ（段階）でセーフティネット機能を働かせることをねらいに、①評価、②相談、③研修の各システムを稼働できる仕組みとした。

２-３　３つの次元の取組

２-３-１　個人の取組

（1）評価

教職員一人ひとりが、性暴力等に関するセルフチェックやストレスチェックにより自身と向き合い、セルフモニタリングする。（添付資料４-１、添付資料４-３）

（2）相談

教職員が、自身の３側面（身体面・心理面・社会面）に関して個人的に相談できる機会があることを認識し、適宜、相談行動をとる。

（3）研修

「e-ラーニング研修」プログラムは、基本的に自分の都合に応じて活用する。

２-３-２　組織の取組

（1）評価

教職員が、性暴力等に関するチェックにより、職場の風土や慣習・文化等をモニタリングする。（添付資料４-２、添付資料４-３）

（2）相談

教職員のニーズに対応できる３段階の相談体制（セルフケア・メンタリング・カウンセリング）を整え、周知する。

（3）研修

シームレス（切れ目ない）な研修のシステム化をねらいに、継続性、利便性、親近性、有用性に力点をおいたミニ研修と従来の研修（コア研修）を組み合わせて運用する。（添付資料５・６・７）

２-３-３　社会の取組

（1）評価

従来、実施されている学校評価に性暴力等の防止に関する評価項目を組み入れ、児童生徒、保護者からの意見を反映する。その結果について、学校運営協議会がチェックする。

（2）相談

学校が、学校運営協議会や教育委員会に性暴力等の防止に関して相談する。また、教職員の多様なニーズに応えるため、校外の専門相談機関の一覧や相談までのフローチャートを整え、周知する。

（3）研修

「生命（いのち）の安全教育」等を授業参観やオープンスクール等で授業公開し、児童生徒とともに保護者や地域住民への啓発を推進する。

２-３-４　年間取組モデル

個人・学校（組織）・地域の３次元で、「対策パッケージ」を実際に取り組んでいく年間取組モデルを示した。このモデルを参考にし、学校の実状に応じて年間計画を立て「対策パッケージ」を運用してもらいたい。（添付資料３）

2-4　期待される効果

（1）学校長のリーダーシップのもと、3 つの次元で取り組むことにより、個人・学校・地域の 3 次元型セーフティネットが形成され、「誰かが見ている」という抑止効果と「誰かが助けてくれる」という心理的安全効果が期待される。

（2）学校等が有するリソースを活用することにより、コストパフォーマンスが期待され、その効果が動力となって持続可能な性暴力等の防止対策へと進展することが期待される。

3　推進チーム会議からの要望

（1）「対策パッケージ」を運用する上で、効率化・持続化を後押しするために、チェックシートやミニ研修などをオンライン上で運用でき、それらのデータを集約・管理できる ICT 環境を整えてもらいたい。

（2）学校に「対策パッケージ」を根付かせていくために、児童生徒等に対する性暴力等根絶に特化した取組等を長期休暇前等に実施してもらいたい。キャッチフレーズの一例として、「あなたの未来に幸せをもたらすために！～セーフティネットのある Well－Being な学校～」を提案しておきたい。

（3）「対策パッケージ」の運用に係わる効果を検証し、課題を抽出して解決の指針を示すような PDCA 機能を有する評価検証制度を整えてもらいたい。

4　参考文献・資料

（1）「教職員による不祥事の根絶―信頼され続ける教職員であるために―」
広島県教育委員会（2014）

（2）「性嗜好障害スクリーニングテスト」
医療法人社団祐和会大石クリニック（URL：https://www.ohishi-clinic.or.jp/）

（3）「ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度」
島津明人（URL：https://hp3.jp/tool/uwes）

（4）「職業性ストレス簡易調査票　（簡略版 23 項目）」　厚生労働省
（URL:https://stresscheck.mhlw.go.jp/download/material/sc23.pdf）

（5）「コンプライアンスハンドブック（改訂版）」 徳島県教育委員会（2020）

（6）「コンプライアンスハンドブック　ケース集」　徳島県教育委員会（2010）

（7）「コンプライアンスハンドブック　ケース集Ⅱ」 徳島県教育委員会（2011）

（8）「コンプライアンスハンドブック　ケース集Ⅲ」 徳島県教育委員会（2012）

（9）「恐れのない組織―「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす」
エイミー・C・エドモンドソン（Amy C. Edmondson ）/野津智子訳(2021)英治出版.

（10）「非行の原因－家庭・学校・社会のつながりを求めて」
ハーシ・T.　（Hirschi, T.）/森田洋司・清永新二監訳（1995）文化書房博文社.

（11）「職場のポジティブメンタルヘルス」　島津明人編著（2015）誠信書房.

(12)「リラプス・プリベンション」G.アラン・マーラット他編/原田隆之訳(2011）日本評論社.
「特集 多様なアディクションとその対応 性的アディクション?その現状と治療」
（精神医学 60 巻 2 号）原田隆之（2018）医学書院

5 推進チーム会議の審議経過ならびにアドバイザー・委員の構成

5-1 審議経過

アドバイザー会議　令和５年　９月 14 日（木）
第１回推進チーム会議　令和５年 10 月 30 日（月）
第２回推進チーム会議　令和５年 11 月 21 日（火）
第３回推進チーム会議　令和６年　１月 15 日（月）
第４回推進チーム会議　令和６年　１月 29 日（月）～31 日（水）メール会議

5-2 推進チーム会議構成メンバー

5-2-1 アドバイザー

アドバイザー氏名	所属	職名	備 考
小坂 浩嗣	鳴門教育大学大学院	教 授	座 長
豊永 寛二	小出・豊永法律事務所	弁護士	
夏目 敦子	富田製薬株式会社	執行役員	
横田 勤	徳島県警察本部警務部	監察課長	

5-2-2 委員

委員氏名	所属	職名	備 考
清田 朝美	阿南市立見能林小学校	副校長	
織野 明弘	徳島県立徳島科学技術高等学校	教 頭	
新居 知美	徳島県立阿南支援学校	教 頭	
佐藤 美幸	美馬市立穴吹中学校	主幹教諭	